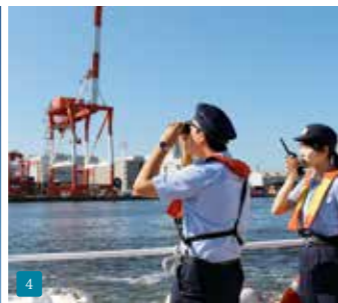


発展は商都とともに

大阪税関は、北は日本海に面する富山県から、南は太平洋に面する和歌山県に及ぶ8府県を管轄しています。管内には、日本有数の国際貿易港である大阪港や大阪湾泉州沖に立地する世界初の完全人工島からなる海上空港である関西国際空港を有しています。

管内における令和4（2022）年の輸出貿易額（確々報値）は14兆3,087億円で全国の輸出貿易額の14.6%を占めており、輸入貿易額（同）は15兆4,626億円で全国の輸入貿易額の13.1%を占めています。国別貿易額では、対中国の割合が輸出は25.2%、輸入は31.3%と比較的高いことが特徴です（全国貿易額に占める対中国の割合は、輸出19.4%、輸入21.0%）。



1 初代大阪税関長(五代友厚)「出典:国立国会図書館」 2 大阪運上所護岸 3 本関庁舎 4 監視取締 5 関西国際空港 6 監視艇 7 夢洲コンテナターミナル 8 監視部庁舎

時代とともに

大阪税関の変遷

大政奉還前、慶応3年8月（1867年）に、江戸幕府により、運上事務（現在の税関の仕事）及び外交事務を取り扱うため、大阪税関の前身である川口運上所が、現在の大阪市西区川口に開設されました。初代長官（税関長）は、実業家としても有名な五代友厚（写真①）です。

慶応4（1868）年、明治新政府により、大阪港の開港と同時に大阪運上所（写真②）と改称され、その後、明治5（1872）年の呼称統一を経て、明治6（1873）年、大阪税関へと改められました。

明治後期に確立した近代的な税関制度の下、大阪を中心とする商工業の発展を背景とした貿易の著しい伸長に伴い、大正9（1920）年に本関庁舎が現在の大阪市港区築港へ移転しました。

第二次世界大戦による貿易の衰退に伴い閉鎖された税関が、昭和21（1946）年6月に再開後、一大生産地及び消費地である大阪を後背地として、大阪国際（伊丹）空港の開港、大阪南港咲洲をはじめとする大規模な港湾造成などが行われました。

平成以降も、平成6（1994）年9月に日本で初めての本格的な24時間運用となる関西国際空港の開港、II期島の滑走路や第2ターミナルの供用開始、大阪北港にある夢洲（大阪市此花区）のコンテナターミナルなどのインフラ整備は、大阪税関の規模拡大に大きく寄与しました。

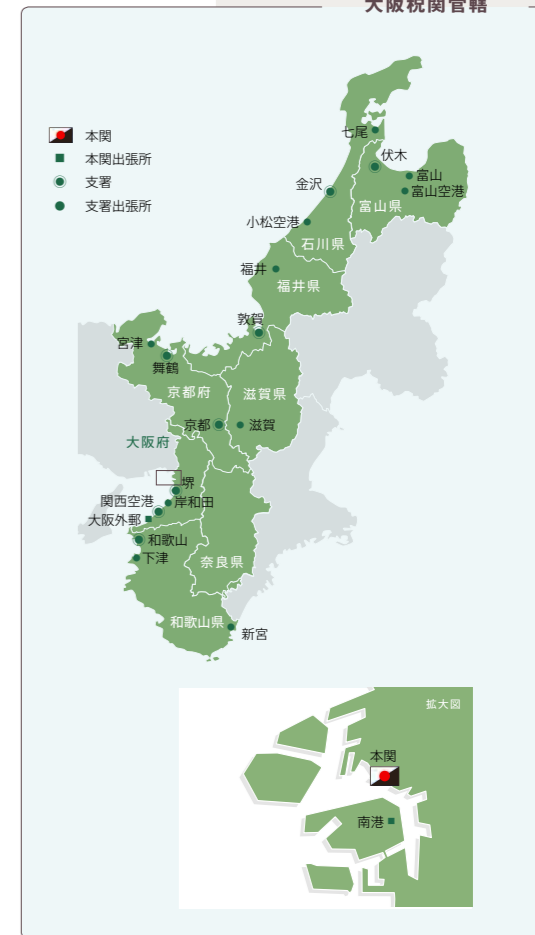
令和となった現在も、Eコマース普及に伴う貨物量の増大など、国際貿易、物流及び観光の目まぐるしい形態変化に応じて、大阪税関は更なる発展を遂げています。

— 大阪税関と国際博覧会との関わり

これまで、大阪税関管内において、昭和45（1970）年に「日本万国博覧会」（於大阪府吹田市）、平成2（1990）年に「国際花と緑の博覧会」（於大阪市鶴見区）が開催されました。これらの万博では、海外から届く展示物等の通関を中心とする税関業務に関し、円滑な事務処理を通じて、運営に携わりました。

来る令和7（2025）年4月13日から約6か月間、“いのち輝く未来社会のデザイン”をテーマとして、『2025年日本国際博覧会（略称「大阪・関西万博」）』が夢洲にて開催されます。大阪税関では、展示物等の迅速な通関などはもとより、テロ対策にも注力し、管内で開催される万博の運営に、万全な体制で再び貢献できるよう、現在、関係団体との協力体制を築いています。

大阪税関管轄



大阪税関の管轄

大阪税関は、大阪府、京都府、和歌山県、奈良県、滋賀県、福井県、石川県及び富山県の8府県を管轄しており、本関は大阪市に所在します。

管内には、外国貿易のために開かれた12の開港（伏木富山港、七尾港、金沢港、福井港、敦賀港、内浦港、舞鶴港、宮津港、阪神港（大阪港区、堺北港区）、阪南港、和歌山下津港、新宮港）と3つの税関空港（富山空港、小松空港、関西国際空港）があり、本関のほか、2つの本関出張所、8つの支署、10の支署出張所があります。

（令和4（2022）年12月現在）